報告

現地研修「別府・日出史跡巡り」（二）
日出城鬼門櫓・松屋寺木下家墓地

吉田勝重
（会員　佐伯市女島）

別府の石垣原古戦場跡を見学した後、バスは一路日出町へと進んだ。

車中、日出町についての説明があった。

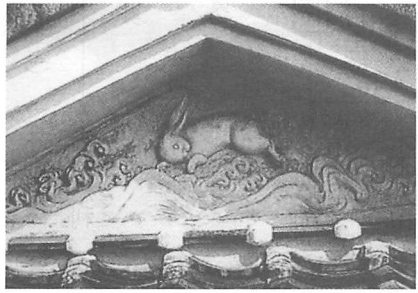
日出町には「鏝絵」がたくさん残っていると言う。

「鏝絵」は大分県北部の山香、安心院、別府に数多く残されており漆喰彫刻として有名である。

日出町の鏝絵は、日出藩お抱えの左官青柳鯉市とその子長市によって広められたという。町内には三十二の鏝絵が残されている。

青柳鯉市は天保十年（一八三九）八月三日、日出後川、日出藩普請方左官、脇儀市の五男に生まれ青柳家の養子となる。長じて脇儀市より左官業を仕込まれる。のち二人は江戸に出て伊豆半島の先端の松崎町の入江長八に師事し修行する。この時、江戸で流行中の「鏝絵」を持ち帰り帰藩後、藩のお抱え左官として活躍する。明治維新後鏝絵の普及に努めている。災禍を除き、家内安全、子孫繁栄を願う漆喰彫刻（鏝絵）が庶民に受け入れられた結果という。指先位の鏝絵が百体程残されており鏝絵の美術館を作る話もある。

別府の鶴田ホテルにも鏝絵が残されている。



（一）日出城（暘谷城）

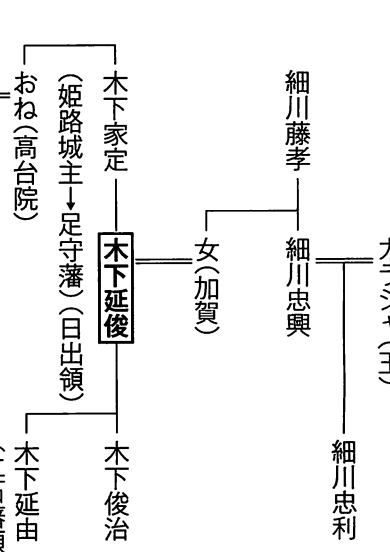
日出藩領は関ヶ原合戦後の慶長六年（一六〇一）、豊臣秀吉の妻、北の政所ねね（高台院）の兄、木下家定（姫路城主）の三男、木下延俊が豊後国速見郡二十八カ村三万石を与えられ、以後廃藩置県まで十六代支配を続けた。

寛永十九年（一六四二）、延俊の第八子延由（延次）が速見郡八村五千石を分与され立石領となる。日出藩はその後二万五千石となり明治に至る。

木下家は、もともと織田信長の家臣であり杉原姓を名乗っていたが、父家定の妹ねねが秀吉の正室になり、木下の姓を許されたという。（杉原家定→木下家定に）

延俊は、その家定の三男であるが関ヶ原の戦いで西軍（石田方）に加わらず一時浪人となった。その後、父家定の備中加陽郡・上房郡二万五千石（足守藩）転封により移住。関ヶ原への積極的な参戦がなかったため領地をもらえず、北の政所ねねや細川忠興、延俊の妻加賀（細川忠興の妹）のとりなしにより、慶長六年（一六〇一）春、日出三万石を与えられ入部した。

〈日出藩・木下延俊の関係図〉



延俊は慶長六年（一六〇一）八月、三層の天守を持つ日出城を築城し翌七年八月に完成させている。

築城の縄張りは細川忠興が行い、石垣は忠興の家臣穴生理右衛門を棟梁に野面積で構築、労力は忠興の命により豊前から動員された。また天守は父家定の助成により構築されたという。

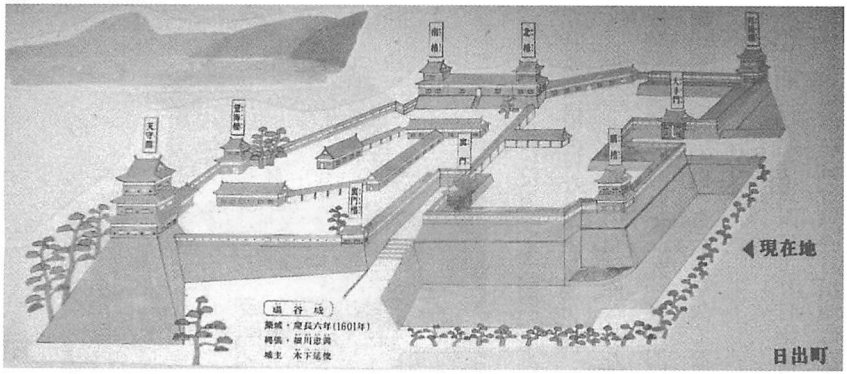
日出城は、南に別府湾を望む台地上に築かれた階郭式の平山城である。南端の崖上に本丸を設け、北三方を二の丸で囲い、東に三の丸、北に更に外郭を配した。二の丸、三の丸には藩の重臣等の屋敷の他、御茶屋や藩校（致道館）、藩運営の諸施設などが置かれていた。外郭には武家屋敷や商人の屋敷があった。各郭は堀により仕切られ要所々々には城門が設けられた。

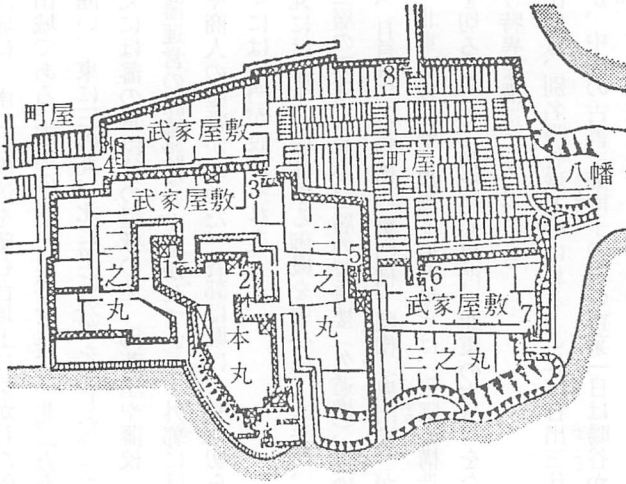
本丸には藩主の居住する御殿を中心に、大手門、搦手門、三層の天守、長屋、二層の望海楼（久遁櫓）、長櫓（渡り櫓）、月見櫓（金物櫓）、裏門櫓、隅櫓（鬼門櫓）が築かれた。北東隅の城壁（隅櫓＝鬼門櫓）は、入隅の構造をなし隅を切ることで「禍を招く鬼門＝北東の方位」をなくすという特異な構造になっている。

日出城は、別名暘谷城と呼ばれる。これは日出三代藩主俊長が、中国の古書、淮南子の中の言葉「日は暘谷から出て咸池に入る」からつけたという。

【日出藩主の移り変わり】

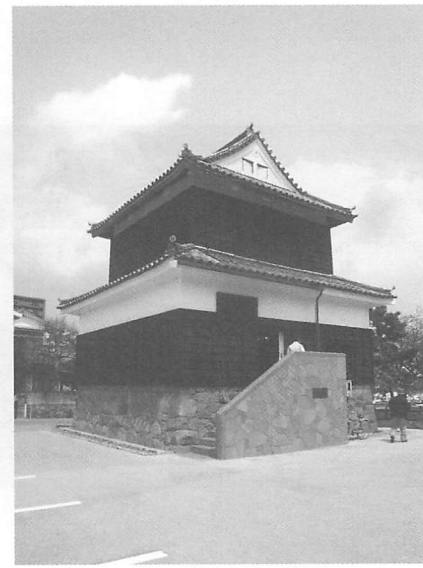
①延俊　②俊治　③俊長　④俊量　⑤俊在　⑥長保
⑦長監　⑧俊能　⑨俊泰　⑩俊胤　⑪俊懋　⑫俊良
⑬俊敦　⑭俊方　⑮俊程　⑯俊愿





凡例：
石垣または土居
門
櫓
1 大手門
2 搦手門
3 外大手門
4 八日市口門
5 中門
6 三之丸口門
7 浜口門
8 藤原口門

（二）鬼門櫓（きもん）


再建された鬼門櫓

鬼門櫓は、本丸の北東に位置する二層二階の櫓で、北東の隅を欠いた特殊な構造になっている。正保二年（一六四五）から慶安二年（一六四九）の間に作られた「豊後国日出城図」に初めて位置づけられている。裏鬼門にあたる南西部の裏門櫓（一層一階の櫓）も石垣を欠くなど鬼門調伏に気を配っている。

明治四年（一八七一）廃藩置県により日出藩は廃止され明治六年（一八七三）の廃城令以降日出城は競売にかけら

れ、鬼門櫓、裏門櫓以外はすべて取り壊された。

本丸跡は暘谷学舎となり日出尋常小学校が作られた。現在本丸跡は日出小学校に、二の丸跡は日出中学校として使用されている。

明治八年裏門櫓は二の丸にあたる民家に残されていた。望海楼は本丸に建てられた日出小学校の裁縫教室に使用され大正四年に取り壊された。

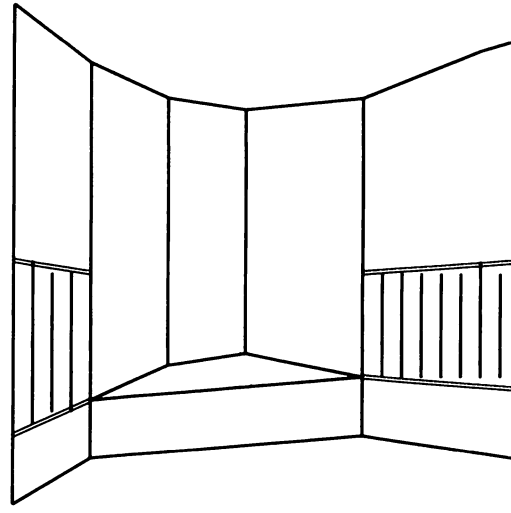
明治期に取り壊されず残されていた鬼門櫓も大正四年に山本羊太郎に払い下げられ、その後、陸軍大将・陸軍大臣の南次郎の父、南喜平が譲り受け「南壽楼」と称して本居とした。明治十年日出尋常高等小学校改築にともない中村貢が買い取り下仁王に移築された。

平成二十年、中村家より日出町に寄贈された。翌二十一年より改築保存工事にかかり元の位置に移築された。

鬼門櫓の内部は、鬼門櫓に関する史料や写真等が展示されている。

内部は一部分が台形のような四角形の棚になっており、部屋全体が五角形の形を示している。

この建物の入り口の瓦には、木下家の家紋の一つ「沢瀉紋」が付けられていた。



鬼門櫓の北西側内部の様子

木下家の家紋瓦は全部で六つある。日出城で多く使われているのは「沢瀉紋」。棟や軒を飾る鬼瓦や軒丸瓦などに施されていた。鬼門櫓は「沢瀉紋」で統一されていた。他に「独楽紋」「黒餅紋」「三梍紋」「菊紋」「桐紋」がある。これは、先祖の杉原氏、豊臣氏、木下氏との関係からこの

ように、いろいろな種類の紋があるという。

私たちは、鬼門櫓の見学のあと、現在残っている石垣、鐘楼等を見てまわった。

元禄８年（1695）、三代藩主木下俊長が鋳造させた鐘で
毎日 12 刻の時を知らせていた。総高 1.35m。

天守の横、海側にある望海楼の石垣跡

（三）康徳山松屋寺・木下家墓所

私たちは次に木下家の墓地のある松屋寺に向かった。松屋寺は、養老年間（七一七～七二四）、僧仁聞菩薩が水月堂を建立し、文明年間に西明寺と改名された。

慶長八年（一六〇三）藩主延俊が木下家の菩提寺として西明寺を造営し、慶長十二年（一六〇七）延俊の祖母、朝日の方（北政所の母）、延俊の正室加賀の法名、「康徳寺殿松屋妙貞大姉」「松屋寺殿即庵貞心大姉」から寺名を「康徳山松屋寺」と改称した。菩提寺は日出と江戸の二カ所にある。江戸における木下藩の菩提寺は赤穂浪士で有名な泉岳寺である。

松屋寺本堂前には二代藩主木下俊治が府内城にあった物を移植したと伝えられる高さ六、四メートル、東に四メートル、西に六メートル、南北に五メートルの大蘇鉄がある。雌樹で十数本の枝が株元から分岐している。

奥にある木下家の墓所には、歴代藩主をはじめ、祖母朝日の方、延俊の正室加賀、父母家定夫妻、延俊や俊治に殉死した家臣、木下家に関係する墓石（五輪塔・角碑棹形）五十二基が立ち並んでいる。

松屋寺の門には沢瀉紋と桐紋が描かれていた。

↑ 康徳山松屋寺全景

← 日本一の大蘇鉄

これらの墓碑群の大半は五輪塔であるが、第十、十四、十五代の墓碑のみが角石棹形（さおがた）の形態をしている。配置は特に規定が無く無秩序に置かれている。また十三代、十六代の墓はない。この二人の藩主は神式の葬儀であったため、東京の青山墓地に葬られている。

日出木下家の墓石群

この墓地の一角に初代藩主延俊公が逝去した際、殉死した四人の家臣、岩尾吉之允、岩尾亀之允、中吹与左衛門、長野普左衛門の墓、二代藩主俊治に殉死した笠置求馬の墓がある。殉死した家臣の墓が一緒に葬られているのは大変珍しい。

木下延俊公の死去の際殉死した
四人の家来の五輪搭

この松屋寺の隣には洞雲山龍泉寺という浄土宗のお寺がある。現在この寺に日出藩家老瀧家の墓がある。

瀧家は「荒城の月」の作曲等で著名な音楽家、瀧廉太郎の祖先にあたり、初代の五郎左衛門俊吉が日出藩の祖、木下延俊に召し抱えられたという。以後重臣として家老等の要職を務めた。瀧廉太郎と父瀧吉弘の墓が大分の万寿寺よりここに移されている。

《立石藩について》

寛永十九年（一六四二）に新たに立藩された立石藩は日出藩のお家騒動を回避する為の措置として行われたようである。

日出藩初代藩主の延俊には十六人の子どもがいた。八名が女子で他家に嫁いでいる。残り八名の男子のうち六名が夭折し、家督相続問題が起きた時、三男俊治と四男俊由の二人が残されているという状態であった。

三男俊治は側室雲興院於ねねの子で、慶長十九年（一六一四）十月生まれの二十八歳。一方の俊由は側室恵昌院於賀井の子で、慶長十九年十一月生まれの廿八歳であった。家督相続における条件はまったく同じであった。

条件の同じ二人の息子、どちらに家督を継がせるかについていろいろな議論がなされたと思う。日出藩（二万五千石）と立石藩（五千石）に分地された経緯は定かでないが、俊治の遺領相続の際内々に行われたようである。

日出藩の『附言纂』によると「最初、御配分の節は、日出三万石の内立石村五千石は、御内分成るが、万事御本家御世話強くこれ有るを以て、俊長公御代に至り、寛文四年甲辰年（一六六四）、御願いによって立石村五千石の内、御朱印別に拝賜し……」と見え、当初は完全な独立藩ではなかったようである。

日出本藩の干渉が強いものであったようで分地側の俊由は、いろいろな政治工作を行い、やっと二十二年後の寛文四年に正式に幕府から朱印状を受け藩として承認された。この間二代藩主俊治と俊由の確執は根強く義絶状態であったという。

この争いは万治元年の俊由の卒去により収束するが、俊由の死は本藩に知らされなかったと伝えられている。

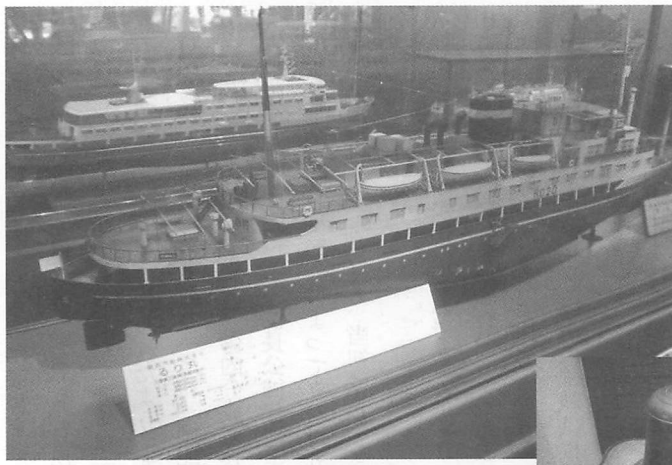
日出本藩と立石藩の和睦は三代藩主俊長と二代藩主延知の時代になされた。立石藩は八坂川の上流、立石中、六太郎、山口、薫石、平山、松尾、吉野渡の八ケ村である。

(四) サンフラワー歴史館

次に私たちは「サンフラワー歴史館」に向かった。新しい観光名所と思っていたが別府観光港にあった。この待合室の一角に「サンフラワー歴史館」があり阪神・別府航路開設百周年を記念として、これまでの歴史や船の模型等が展示されていた。

サンフラワー歴史館

この歴史館には、㈱さんふらわあの阪神ー別府航路開設百周年の歴史や船の模型、ポスター等が展示されていた。



汽船るり丸の模型と当時のベル